

東日本大震災から四カ月が経過し、想像を絶する甚大な被害の全貌が明らかになりつつあります。

特に、自身の命を顧みず、職務を最後まで全うして犠牲となられた方々の存在は、私たちの胸に永遠に刻みつけられることとなりました。

津波到達の直前まで、防災無線で町民に高台への避難を繰り返し呼びかけ、自身は津波によって行方不明となった宮城県南三陸町の女性職員。

目下まで水が押し寄せている中、マイクも使わずに「内陸に行け！」と叫びつつ警棒を力いっぱい振り、多くの市民を誘導して自身は帰らぬ人となった宮城県警仙台南署の警察官。

その他にも、警察・消防・各自治体職員のかげがえのない尊い命が、職務を懸命に遂行する中で、殉職・行方不明という結果となっています。

被災地の復興や福島第一原発の問題という深刻な課題において、現在に至るまで自衛隊・海上保安庁・自治体職員・電力関連会社の方々が日夜献身的な尽力をされています。その事実には、ただただ頭が下がるばかりです。

この「国難」を乗り越えるには、こうした献身的に他人を慮るといふ、私たち日本人が持つ素晴らしい特性を発揮することが求められます。それぞれの立場でできることを、長期にわたって継続して取り組むことが何よりも必要です。

『聖書』に「やもめのレプタ」の話が記

自己の範囲内で できることをする



述されています。

イエスは献金箱に向かつて座り、人々が献金する様子を見ておられました。多くの金持ちが、これ見よがしに大金を投げ入れました。彼らは誰よりも多くをささげ、献身的な生活をしていることを誇っていたのです。

そこへ一人の貧しいやもめが来て、レプタ銅貨二枚を入れました。彼女は神様にわずかなものしか捧げることのできない自分に、恥ずかしさを感じていました。人々もこのようなやもめの献金を軽んじていました。

しかしイエスは弟子たちを呼び寄せて、「この貧しいやもめが最も多くを捧げた」と言いました。彼女は乏しい中から、自分の持っているものすべて、生活費の全部を捧げたからです。

(マルコによる福音書にある挿話。)

注：レプタとは当時の通貨の最小単位)

東日本大震災の復興に向けて、義援金・物資・労働力…と様々な支援の形が全国各地で広がりをを見せていることは、先人が連綿と培ってきた、尊く良き習慣の発露といえるものでしょう。

まずは「今この時」という範囲の中で、自分のできる事柄を確実に為すことから始め、自己の心と向き合ひましょう。洋の東西や時間的な差異をも超越した私たち人間の美徳を、継続的に発揮していきたいものです。